

# 児童が自ら課題意識を連続発展させる総合的な学習の時間の指導の工夫

## — 児童と地域をつなぐ対話の活用を通して —

竹原市立竹原小学校 植竹 桜

### 研究の要約

本研究は、児童が自ら課題意識を連続発展させる総合的な学習の時間の指導の工夫について考察したものである。文献研究から、児童が自ら課題意識を連続発展させるためには、教師の働きかけが重要であることが分かった。これまでの所属校の取組で、児童の思いと地域の思いを共有させることが難しくなり、児童の課題意識を学習の途中で途切れさせてしまった反省から、本研究では、教師の働きかけとして、児童と地域をつなぐ対話を活用することとした。対話の活用をし、児童と地域の人々が合意した上で課題を設定することは、児童が自身の認識を問い直すことになり、児童と地域の人々の相互理解のきっかけになった。また、対話における地域の人々の経験を踏まえた指摘は、児童が自身の認識を問い直し、現実問題に即して自分の考えを見直すことになった。このことから、総合的な学習の時間において、児童と地域をつなぐ対話を活用することは、児童が自ら課題意識を連続発展させることに有効であることが分かった。

## I 主題設定の理由

所属校は、竹原市街のほぼ中央に位置し、174名の児童が在籍している。校区には国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定された町並み保存地区がある。令和2年度よりコミュニティ・スクールとして教育活動を行い、第3学年から第6学年の総合的な学習の時間においても、地域や学校の特色に応じた探究課題を設定し、学習を進めている。全国学力・学習状況調査児童質問紙における「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問に対する所属校の肯定的回答率を平成30年度から令和4年度の4年間（令和2年度は新型コロナウイルス感染症に係る学校教育への影響等を考慮し未実施）で比較すると、80%を超える年度もあれば50%台に留まった年度もあった。いずれの年度も前年の第5学年のときに総合的な学習の時間で同じ探究課題を設定し、同じ教師が指導し、児童自らが課題意識をもち、地域の問題を解決することを目指して学習を進めてきた。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編（平成30年、以下「29解説」とする。）には、「総合的な学習の時間にあつては、児童が実社会や実生活に向き合う中で、自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが欠かせない。」<sup>1)</sup>とあり、課題の設定の際には、教師の意図的な働きかけが重要であると示されている。また、「探究的な学習

の中で児童が感じる手応えは、一人一人の意欲や自信となり次の課題解決を推進していく。」<sup>2)</sup>とある。肯定的回答率が50%台に留まった年度は、児童の思いと地域の思いを共有させることができず、児童が新たな問題に直面した際に、教師や地域が示した活動を行ったことで、児童の課題意識が学習の途中で途切れてしまった。児童の課題意識を連続発展させる働きかけができなかったことで、児童の手応えも薄れていった。年度によって肯定的回答率に差が生まれた要因は、教師の働きかけにあると考えた。

そこで本研究では、教師の働きかけとして児童と地域をつなぐ対話の活用をすれば、総合的な学習の時間において児童が自ら課題意識を連続発展させることができると考え、本研究題目を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 児童が自ら課題意識を連続発展させるとは

#### (1) 探究課題について

「29解説」では、「各学校において定める内容については、目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を示すこと。」<sup>3)</sup>とあり、ここでいう探究課題は、指導計画の作成段階において各学校が内容として定めるもので、児童が自ら設定する課題のことではないと示されている。

本研究で実践する所属校の第5学年の単元は、全体計画に定めた探究課題「地域の活性化を目的に町並み・竹をテーマとして活動を展開している人々の思いや願い」を踏まえて構想した単元である。

## (2) 課題とは

「29解説」では、「課題設定については、児童が自分の事として課題を設定し、主体的な学びを進めていくようにするために、実社会や実生活の問題を取り上げることが考えられる。」<sup>4)</sup>と示されている。

安斎・塩瀬(2020)は、「問題」について「何かしらの目標があり、それに対して動機づけられているが、到達の方法や道筋がわからない、試みてもうまくいかない状況のこと」<sup>5)</sup>と定義し、関係者一人一人の「問題」は、同じ状況にあってもそれぞれの認識によって解釈が異なると述べている。続いて、「課題」を「関係者の間で「解決すべきだ」と前向きに合意された問題のこと」<sup>6)</sup>と定義している。

本研究では、児童が捉える問題と地域の人捉える問題は同じ状況にありながら、解釈は異なる。そこで、対話の活用を通して、児童と地域の人が「問題を解決するためにできることを考えよう」と合意したものを「課題」とする。この「課題」は、広島県教育委員会の示す「単元を貫く問い」と同一のものであり、実際の授業では「単元全体を通して解決を目指す課題」として扱う。本研究では、表1のように設定した。

表1 単元全体を通して解決を目指す課題

|    |    | 地域                                                   | 児童                        |
|----|----|------------------------------------------------------|---------------------------|
| 問題 | 目標 | 観光客を増やしたい。<br>竹原市の観光客数の目標：2027年の観光客数143万人            |                           |
|    | 状況 | メディアの影響で観光客が増えた年もあったが、近年は新型コロナの影響で観光客は減っている。         |                           |
|    | 解釈 | 地域住民が主体となり竹原の魅力を観光客に「もう一度行力を伝え、観光客の要望に沿ったおもてなしをしたい。」 | 観光客に「もう一度行きたい。」と思ってもらいたい。 |
| 課題 |    | 観光客に竹原のいいところを伝えて、「楽しかった!」と言ってもらおう活動にしよう。             |                           |

## (3) 課題意識とは

神田(2023)は、課題設定の場面で、児童が問題に対して解決の必要感をもつことで、児童は「どうにかして解決しなければならない」と課題意識を高める場合が多いと述べている。

本研究では、児童と地域の人が合意し、課題を設定したことで、児童の中に「地域の問題をどうにかして解決したい。」という思いが生まれると考え、この「どうにかして解決したい。」という児童の思いを課題意識とする。

## (4) 課題意識を連続発展させるとは

「29解説」では、総合的な学習の時間において、よりよく課題を解決し、自分の生き方を考えるための資質・能力を育むためには、「自ら問いを見いだし、課題を立て、よりよい解決に向けて主体的に取り組むことが重要である。」<sup>7)</sup>と示されている。

齊藤(2021)は、課題の解決過程で生まれる疑問などを「問い」とし、「その問題を意識している人がまだ解の見通しを明確な言葉にできないような疑問や気づきを意味する語」<sup>8)</sup>と述べている。

本研究では、「単元全体を通して解決を目指す課題」の解決過程で生まれる疑問や調べていきたいことを「問い」とする。この「問い」は、広島県教育委員会の示す「個別の問い」と同一のものであり、実際の授業では、本時に解決を目指す「本時の課題」として扱う。本研究の「課題意識を連続発展させる」の「連続」とは、「本時の課題」を解決していく過程で、新たな「問い」が生み出され、それが次の時間以降の「本時の課題」につながることを考えた。また、「発展」とは、対話の活用を通して、新たな視点が加わることで、児童の課題意識が高まることを考えた。以上より、「課題意識を連続発展させる」とは、児童が自ら「問い」をつなぎ、課題意識を高めていくこととする。

## (5) 児童が自ら課題意識を連続発展させる姿とは

田村(令和2年)は、総合的な学習の時間の評価基準の設定の手順として、実現が期待される児童の姿が、単元のどの場面のどのような学習活動において、どのような姿として実現されるかをイメージし、実際の探究活動の具体を想起しながら言語化することを示している。

本研究で目指す「児童が自ら課題意識を連続発展させる具体的な姿」を表2のようにイメージした。

表2 児童が自ら課題意識を連続発展させる具体的な姿

| 場面     | 児童の姿                                                 |
|--------|------------------------------------------------------|
| 課題の設定  | ①地域の問題を見いだす活動から、次の時間以降の「本時の課題」につながる「なぜ?」を発見している。【連続】 |
|        | ②対話を通して、自分の考えを見直し、修正している。【発展】                        |
|        | ③「単元全体を通して解決を目指す課題」を解決するために、何を調べるかを考えている。【連続】        |
| 情報の収集  | ④調べたり見学したりすることを通して、新たな疑問やさらに詳しく調べたいことを見つけている。【連続】    |
| 整理・分析  | ⑤対話を通して、自分の考えを見直したり、新たなアイデアを考えたりしている。【発展】            |
|        | ⑥まとめ・表現に向けて、どんな準備が必要かを考えている。【連続】                     |
| まとめ・表現 | ⑦学習を振り返って、地域との関わり方や自分にできることを考えている。【発展】               |

「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(小学校編)」(令和3年)には、学校で設定した探究課題の地域や学校の特色に応じた課題は、郷土の創造に関わる課題であり、「地域社会に生きる

すべての人が、その地域ならではのよさに気づき、問題点を自分のこととして受け止めるとともに、日々の生活の中で自己の生き方との関わりで考え続け、よりよい解決を目指して行動することが望まれる。」<sup>9)</sup>と示されている。また、総合的な学習の時間においては、「児童の内にはぐくまれているよい点や進歩の状況などを積極的に評価することが欠かせない。」<sup>10)</sup>とあり、ものの見方や考え方が変わったこと、自己の生き方につなげて考えようとしたことなどを、児童の学習の姿などから見取り、汲み取ることが示されている。

本研究で児童が地域の問題点を自分のこととして受け止め、自ら課題意識を連続発展させることができれば、児童の「ものの見方や考え方」「自己の生き方」が変容すると考えた。このことを表3に示す。

表3 学習前後の意識の変容

| 視点                                                                          | 質問項目                             |
|-----------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>ものの見方や考え方</li> <li>自己の生き方</li> </ul> | 竹原のいいところは、どんなところですか。             |
|                                                                             | 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。 |
|                                                                             | ①単元の最初に考えていたこと                   |
|                                                                             | ②単元を通して考えたこと<br>③単元を終えて考えたこと     |

地域のよさについては、学習前はそれぞれの児童の既存の知識で捉えていたものが、学習後には、体験や地域の人との関わりなどを通して得たものへと変容することが考えられる。また、自己の生き方についても、学習後には、より自分のこととして捉えたものへと変容することが考えられる。

## 2 児童が自ら課題意識を連続発展させる指導の工夫について

### (1) 課題意識を連続発展させるための教師の働きかけについて

「29解説」では、児童が自ら課題をもつためには、教師が意図的な働きかけをすることが重要であると示されている<sup>(1)</sup>。

深谷(2021)は、「探究力を養いながら探究をうまく進めるには、教師の適切な働きかけが求められる。」<sup>11)</sup>と述べている。また、探究的な学習に取り組んだ高校生の開始当初に見られた意欲が、研究終了時には減退していたという研究報告から、教師が「探究をいかに支援しうかを検討することは重要な課題といえる。」<sup>12)</sup>と述べている。

所属校のこれまでの取組を振り返ったときに、課題の設定の場面で課題意識をもつことができて、学習の途中でその課題意識を連続発展させることが

難しくなった年度があった。表4は、全国学力・学習状況調査児童質問紙における「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問項目に対する所属校の結果である。

表4 全国学力・学習状況調査児童質問紙結果

|        | 肯定的回答率(%) |       |
|--------|-----------|-------|
|        | 所属校       | 全国    |
| 平成30年度 | 56.7%     | 49.9% |
| 平成31年度 | 84.4%     | 54.5% |
| 令和2年度  | 未実施       |       |
| 令和3年度  | 100%      | 52.4% |
| 令和4年度  | 57.2%     | 51.3% |

いずれの年度も全国平均は上回っているものの所属校の肯定的回答率には、大きな差が生じている。この4年間、前年の第5学年のときに、同じ探究課題で、同じ教師が指導し、児童自らが課題意識を持ち、児童の思いを教師が地域に伝えることで学習を進めてきた。児童が新たな問題に直面した際に、児童と地域の思いを共有させることができ、児童と地域が目指す活動のゴールを修正しながら学習を進めることができた年度は、肯定的回答率が80%を超えている。一方で、学習の途中で児童と地域の思いにずれが生じ、思いを共有させることが難しくなった年度は、肯定的回答率も50%台に留まった。この年度は、学習の途中から教師や地域が示した活動を行ったことで、児童の課題意識は薄れていった。

これらのことから、教師の働きかけにより児童と地域の思いを共有させることができれば、課題意識を連続発展させることができると考えた。そこで本研究では、児童と地域の思いを共有させる場として、「児童と地域をつなぐ対話」を活用する。

### (2) 児童と地域をつなぐ対話とは

「29解説」では、「対話的な学び」とは、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深めるような学びであり、異なる多様な他者と対話することの価値の一つとして、他者と共に新たな知を創造する場の構築と課題解決に向けた行動化への期待を挙げている<sup>(2)</sup>。

安斎・塩瀬(2020)は、対話とは「あるテーマに対して、自由な雰囲気の中で、それぞれの「意味づけ」を共有しながら、お互いの理解を深めたり、新たな意味づけをつくりだしたりするためのコミュニケーション」<sup>13)</sup>としている。議論や討論のように答えを導く必要はなく、相手がどのような前提からその意味づけをしているのか理解を深めることを重視している。対話を通して、自分自身の認識を問い

直したり、相互理解したりするきっかけになり、認識と関係性が新たに編み直されたからこそ、新たな問いが立ち現れると述べている<sup>(3)</sup>。

本研究では、課題の設定の場面と学習の途中に「児童と地域をつなぐ対話」の場を設定する。対話を活用することで、児童は自身の認識を問い直すことになり、地域の問題を自分のこととして捉え、地域の人と合意した上で課題意識をもつことができると考えた。また、地域の人と問題を解決したいという相互理解のきっかけになるとともに、新たな問いを生み出したり考えを見直したりすることにつながり、課題意識を連続発展させることができると考えた。

### (3) 児童と地域をつなぐ対話の手順

梶田（令和3年）は、対話は複数の話者が交互に発言すれば成立するというものではなく、相互の内面世界同士の絡み合いが生じなくてはならないと述べている。そして、対話が成立するための条件として、次の三つを挙げている。

- (1) 自分自身の見方や考え方を、自分自身の実感・納得・本音に基づき、ある程度まできちんと整えた上で発言する。
- (2) 相手の見方や考え方に十分に耳を傾け、すぐに同調したり反発批判したりしないで、自分自身の見方や考え方と違うところ・同じところについて考えてみる。
- (3) 自他の間にある違いを多面的に吟味検討し、相互の対立が乗り越えられるような新しい視点を互いの努力によって見つけ出すよう努める。

この条件を参考に、本研究における対話の手順を表5のように整理した。

表5 本研究における対話の手順

|       |                                    |
|-------|------------------------------------|
| 対話の手順 | 【事前連携】地域の人と対話の目的や内容を確認する。          |
|       | 【対話に向けての準備】どのようなPR活動をするか、自分の考えをもつ。 |
|       | 【対話】                               |
|       | ①自分の考えを地域の人に伝える。                   |
|       | ②地域の人の話を聞く。                        |
|       | ③自分の考えを見直し、修正する。                   |
|       | ④修正した考えを地域の人に伝え、検討する。              |

## III 研究の仮説及び検証の視点と方法

### 1 研究の仮説

総合的な学習の時間において、児童と地域をつなぐ対話の活用をすれば、児童が自ら課題意識を連続発展させることができるであろう。

### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表6に示す。

表6 検証の視点と方法

|   | 検証の視点                             | 方法                               |
|---|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 | 対話の活用を通して、児童は課題意識を連続発展させることができたか。 | 表2の児童の具体的な姿②⑤で見取る。(ワークシートの記述内容)  |
| 2 | 学習前後の児童の意識にどのような変化が見られたか。         | 表3の視点で変化を見取る。(ワークシートの記述、振り返りの内容) |

## IV 研究授業について

研究授業について、表7に示す。

表7 対話の活用を取り入れた研究授業について

|        |                                                                                                                                          |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 期 間    | 令和5年6月14日～令和5年7月19日                                                                                                                      |
| 対 象    | 所属校第5学年（1学級26人）                                                                                                                          |
| 単元名    | 竹原PR大作戦Ⅱ                                                                                                                                 |
| 目 標    | 町並み保存地区を活かしたPR活動を実行することを通して、竹原の活性化を目的に町並み・竹をテーマとして活動を展開している人々の思いや願いを理解し、竹原を活性化させるために地域の一員としてできることを考えとともに、地域との関わり方を考えるきっかけをもつことができるようにする。 |
| 過 程    | 学習活動                                                                                                                                     |
| 課題の設定  | 1・2 自分が思い描く竹原の理想の姿から現実を捉え直し、どんなPR活動をしたいか考える。【対話に向けての準備】                                                                                  |
|        | 3・4 【児童と地域をつなぐ対話 1回目】児童と地域の人が合意した上で、単元全体を通して解決を目指す課題を設定する。                                                                               |
|        | 5 学習計画を立てる。                                                                                                                              |
| 情報の収集  | 6・7 町並み保存地区を見学し、竹原のいいところの情報を集める。                                                                                                         |
|        | 8・9 町並み保存地区の見学を通して得た情報を整理し、どんなPR活動ができるか考える。                                                                                              |
|        | 10 実現可能なPR活動にするための視点を考える。                                                                                                                |
|        | 11 他の地域のPR活動や小学生がしているPR活動を調べる。                                                                                                           |
|        | 12 グループで企画書を作る。【対話に向けての準備】                                                                                                               |
| 整理・分析  | 13・14 【児童と地域をつなぐ対話 2回目】地域の人の意見をもとに、実現可能なPRかどうか、時間・準備・お金・場所等の視点で自分の考えを見直し、修正する。                                                           |
|        | 15 地域の人の意見をもとに、「5年生の企画書」を作る。                                                                                                             |
|        | 16・17 PR活動実行に向けて、準備をする。                                                                                                                  |
|        | 18・19 観光客や地域の人と関わり、PR活動を実行する。                                                                                                            |
| 表現・まとめ | 20 学習を振り返る。                                                                                                                              |

児童が自ら課題意識を連続発展させるためには、対話の場での地域の人との役割と教師の働きかけが重要であると考え、地域の人と対話前に事前連携を行った。連携内容を表8に示す。

表8 事前連携の内容と教師の働きかけ

|        | 地域の人と連携内容と教師の働きかけ                                                                                                                                                                                                                   |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1回目の連携 | ・学習のねらいや1回目の対話の目的（課題を設定する）を伝える。<br>・児童に話してほしいこと（活動を始めたきっかけ、誰に向けて、どんな思いで、どんな活動をしてきたか）を伝える。<br>・地域の人には、児童が課題を設定するところまで参加してもらう。課題の設定の際には、教師が地域の人の思いが入っているかを確認する。                                                                       |
| 2回目の連携 | ・2回目の対話の目的（実現可能なPR活動にする）を伝える。<br>・児童の企画書をもとに、どんなアドバイスができるか（実現可能な点、実現が難しい点）を考え、アドバイスの内容を確認する。<br>・児童の企画書をもとに、どんなPR活動ができるか教師が考え、地域の人に伝える。PR活動の方向性を教師と地域の人で共有し、対話の中で実現に向けてアドバイスをしてもらう。<br>・地域の人には、PR活動の内容を決める段階まで参加してもらい、状況に応じて意見をもらう。 |

## V 研究授業の分析と考察

# 1 対話の活用を通して、児童は課題意識を連続発 させることができたか

## (1) 1 回目の対話とPR活動の内容の変容

単元の導入で、竹原市の観光客数の現状や目標が書かれた新聞記事を活用したことで、児童は「観光客を増やしたい。」という思いをもった。そこから、観光客に「もう一度行きたい。」と思ってもらうPR活動を考えることになった。1回目の対話で、地域の人が竹原市やメディアに頼るのではなく、自分たちが主体となって様々な取組を考え、活動されていることや竹原の古い町並みや文化を後世に残し、「竹原の魅力を多くの人に知ってもらいたい。」という思いで活動されていることを知り、児童は表9のように自身の認識を問い直すことになった。

表9 1 回目の対話後の児童の振り返り

|                                                                       |
|-----------------------------------------------------------------------|
| ・観光客を増やすのは、簡単そうで簡単に増えるわけではないことが分かった。                                  |
| ・2027年に143万人を目標にしていたけど、Sさん（地域の人）の話を聞いて、2027年で143万人はそんなに簡単ではないことが分かった。 |

その後、児童の「もう一度行きたい。」と思ってもらう活動と地域の人の竹原の魅力を多くの人に知ってもらう活動が大失敗になるケースを出し合った。児童は「楽しかったと言ってもらう活動」、地域の人には「いいところを伝える活動」を目指していることを児童と地域の人が相互理解し、合意した上で「観光客に竹原のいいところを伝えて、楽しかったと言ってもらう活動にしよう。」という単元全体を通して解決を目指す課題を設定した。課題の設定によりPR活動の内容に表10のような変容が見られた。

表10 児童が考えたPR活動の内容（1回目の対話前後）

| PR活動の内容    |                                  | 人数（複数回答）                                                                                           |
|------------|----------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 対話前        | 竹の置物や竹細工を作る体験をしてもらう。プレゼントする。     | 15人                                                                                                |
|            | 竹原のいいところを紹介する。                   | 4人                                                                                                 |
|            | おすすめの観光地（大久野島・道の駅・海の駅）をPRする。     | 4人                                                                                                 |
|            | その他（料理を食べてもらう・塩をプレゼント・商品開発）      | 6人                                                                                                 |
| 対話後        | 竹の置物を作る体験をしてもらう。                 | 1人                                                                                                 |
|            | 竹原のいいところを紹介する。                   | 14人                                                                                                |
|            | 観光地（町並み保存地区）を案内する。               | 5人                                                                                                 |
|            | 商品開発                             | 1人                                                                                                 |
|            | 悩み中                              | 2人                                                                                                 |
|            | 未記入                              | 2人                                                                                                 |
| 個人のPR活動の変容 |                                  |                                                                                                    |
| 児童         | 対話前                              | 対話後                                                                                                |
| A          | 観光客に竹の置物を売る。竹馬、竹ぼっくりを作って、遊んでもらう。 | 竹の置物をただ売るのではなく、体験をしてもらうと、観光客に「楽しかった!!」と思ってもらえると思う。体験だけでなく、竹原のことを教えると、楽しいと思ってもらえて、竹原のことも知ってもらえると思う。 |
| B          | 観光客に向けて竹で置物やキーホルダーを作ってプレゼントする。   | 悩み中。竹原のことをもっと知り、観光客に伝える情報を集め、分かりやすく伝えたい。                                                           |

対話前は竹を使った活動を考えている児童が多かったが、対話後は単元全体を通して解決を目指す課題を意識した活動へと変容した。児童は地域の人の「いいところを伝えたい。」という思いを取り入れており、相互理解のきっかけになったことが分かる。

A児は、自分たちの思いと地域の人の思いが両方入るようにPR活動の内容を見直し、修正している。B児は、PR活動の内容を修正することはできなかったが、竹原のいいところを伝えるためには、情報を集める必要があることに気付いている。自身の認識を問い直し、新たな問いを生み出すことにつながっている。

1回目の対話後、竹原のいいところを調べるために、地域の人の案内のもと町並み保存地区を見学した。1回目の対話で児童と地域の人が思いを共有し、互いに合意した上で課題を設定したことで、地域の人は「観光客に楽しんでもらうために。」という児童の思いを取り入れ、町並み保存地区を案内し、児童は見学後、地域の人の思いに共感し「町並み保存地区のよさや魅力を伝えたい。」と考えるようになった。

これらのことから、対話の活用は、児童が自身の認識を問い直すとともに、児童と地域の人が互いの思いを共有することになり、相互理解のきっかけになった。児童は地域の人と「PR活動を成功させたい。」という課題意識をもつことができ、地域の人にも課題を理解し、児童の思いを受け止めることにつながった。対話の活用をし、児童と地域の人が合意した上で課題を設定することは、児童が課題意識をもつことに有効であったと言える。一方で、対話前後で活動内容に変容が見られなかった児童や未記入の児童もいた。これは、この段階では問題を自分のこととして捉えることができなかったためと考える。

## (2) 2 回目の対話とPR活動の内容の変容

1回目の対話後、児童は見学したことや調べたことをもとに、再度PR活動を考えた。その後、お金や準備の時間等の問題を考えること、観光客が少ないことも想定することを学級全体で出し合った上で、似たような考えの児童でグループを作り、企画書を作成した。児童は、1回目の対話後から課題意識をもち続け、自信をもって2回目の対話に臨んだことが表11の児童の振り返りからもうかがえる。

表11 1 回目の対話を振り返って（単元終了時）

|                                                                                       |
|---------------------------------------------------------------------------------------|
| ・みんなの課題が決まったときは、「がんばるぞ!」「楽しそう」と思った。だから、企画書を作るときには、なぜこの企画にしたのか理由を書くことや具体的に考えることをがんばった。 |
|---------------------------------------------------------------------------------------|

・みんなの課題が決まったとき、「これは楽しんでもらえるな。」という気持ちになった。「竹原を知ってもらいたい」「楽しんでもらいたい。」という思いで企画書を作った。一つ一つ丁寧に書いたり、真剣に考えたりすることをがんばった。

2回目の対話は、グループごとに企画を説明し、地域の人から意見をもらった。地域の方は自身の成功体験や失敗したことを語り、それぞれの企画が実現可能かどうかについて意見を述べた。児童は地域の人に「景品を準備するためのお金はどうするのか。」「PR活動実行の日までに自分たちで準備ができるのか。」「夏の暑い時期は、観光客が少ない。」等を指摘され、問題に直面する。児童は、自分たちが考えた企画は問題点を十分に考えたものではなかったことに気づき、自身の認識を問い直すことになる。地域の人の指摘を受け、「PR活動の実行は無理ではないか。」「問題を解決するのは難しいからあきらめたい。」という思いをもった児童もいた。「あきらめる。」の声を受け、教師が次の活動を示してしまうと児童の課題意識が途切れてしまう。これまでの所属校の取組では、活動内容を決める段階に地域の人に参加することはなかった。今回は、地域の人の前で児童の「あきらめたい。」「あきらめたくない。」の思いを聞くこととした。そして、児童の思いを聞いた地域の人「お金がないからあきらめていたら、自分はこんな活動はしていない。みんなもクラスで知恵を出し合って、いろいろなことをしていけばいい。」と語り、児童は自分たちの考えを見直し、修正することとなった。表12に2回目の対話後の活動内容の変容を示す。

表12 2回目の対話後の変容

| PR活動の内容の変容                        | 人数(2人) |
|-----------------------------------|--------|
| 地域の人に指摘された点で見直し、新たなアイデアを出している。    | 9人     |
| 地域の人に指摘された点で見直している。               | 8人     |
| 地域の人に指摘された点で見直しているが、実現不可能だと考えている。 | 5人     |
| 変容なし・未記入                          | 2人     |

2回目の対話の地域の方の経験を踏まえた指摘は、児童が自身の認識を問い直し、問題を自分のこととして捉えることにつながった。また、課題意識が途切れそうになった場面で地域の方が児童に語る言葉は、児童が指摘された問題点に納得し、地域の方の意見を受け止めて次の活動を考えるきっかけになった。児童と地域の方の相互理解のきっかけになったことで、新たな問いを見だし、課題意識を連続発展させることにつながったと言える。

これらのことから、対話の活用は、児童が自身の認識を問い直し、現実問題に即して自分の考えを見

直すことができるとともに、相互理解のきっかけになり、課題意識を連続発展させるためには有効であったと言える。

### (3) 対話の活用と振り返り

児童が自ら課題意識を連続発展させるために、振り返りの視点として「次の時間に考えたいこと」を示し、教師がその中から「本時の課題」につながる記述を毎時間の授業の導入で紹介した。対話前後とPR活動実行日の振り返りを表13に示す。

表13 対話前後とPR活動実行日の振り返り（下線は筆者）

| 振り返り    |                                                                                                                                                                                |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1回目     | 対話前                                                                                                                                                                            |
|         | ・もっと竹原のことを覚えたい。<br>・もっと詳しくPRのことを考えたい。<br>・地域の方の意見も聞いて考えることをがんばりたい。                                                                                                             |
| 2回目     | 対話後                                                                                                                                                                            |
|         | ・竹のことや町並みについて調べたい。<br>・竹原のいいところをあまり知らないから、いいところを調べたい。<br>・観光客はどんなことをしたらうれしいか考えたい。                                                                                              |
| PR活動実行日 | 対話前                                                                                                                                                                            |
|         | ・みんなの案を聞き、 <u>みんなの案のいいところを自分たちの案に加えて</u> 、みんなが「納得」「いいね」と思う案にしたい。<br>・考え方が違う人がいても <u>理由をしっかりと言ったり、自分の意見を言ったりすれば、納得させることはできるかもしれない。</u>                                          |
| PR活動実行日 | 対話後                                                                                                                                                                            |
|         | ・実現は難しいと思ったけど、 <u>Sさん（地域の人）が言うように絶対に打開策はあると思う。</u> だから、簡単にはあきらめたくない。<br>・この対話がなかったら、できないことを無理やりやらないといけなかったかもしれない。まだどうすればよいか分からないが、明日はいろいろな案が出たから、 <u>案のよい部分を合わせてやることを決めたい。</u> |
| PR活動実行日 | 対話後                                                                                                                                                                            |
|         | ・実行前は、本当に置いてもらえるのか、 <u>断られたらどうしようか考えていた。</u> 許可をもらえて、ほっとした。<br>・お店の人が <u>許可してくれなかったら、どうするか考えていた。</u> 観光客の人に直接カードを渡して喜んでもらえてうれしかった。                                             |

1回目の対話後の記述は、対話前に比べてより具体的なものへと変容している。対話の活用により児童は既存の知識では、「竹原のいいところ」は伝えられないことに気づき、自身の認識を問い直すことになり、新たな問いを生み出すことにつながった。

毎時間の授業の導入で振り返りを活用したことで、2回目の対話の前には解決の道筋が書かれた記述も見られるようになり、児童自身が地域の人と対話をする意味を感じている。2回目の対話後には、地域の人との対話に手応えを感じている振り返りも見られた。対話後は、新たな問いや解決の道筋が書かれた児童の振り返りを教師が意図的につなぎ、児童は地域の方のアドバイスをもとに自分たちの考えを精査・修正し、学級全体で「5年生の企画書」を作成した。対話後も児童は地域の方の思いを受け止めていたことが分かる。

PR活動は、町並み保存地区の魅力を書いたカードをお店に置いてもらい、観光客にカードラリーを楽しんでもらうこととなった。活動実行日には、お店やお寺にカードを置いてもらうお願いに行った。2回目の対話で、児童は現実問題に直面したことから、実行日当日も許可をもらえるのか不安を感じて

いた。児童の振り返りから、許可をしてもらえなかったときの対応も考えようとしており、課題意識が連続発展している様子がうかがえる。

これらのことから、対話の活用により新たな視点が加わったことで、児童は自身の認識を問い直すことになり、新たな問いが生まれたり、解決の道筋を考えたりすることができた。対話の活用は、自分の考えを精査・修正することができ、課題意識を連続発展させるためには有効であったと言える。

2 学習前後の児童の意識にどのような変容が見られたか

(1) ものの見方や考え方の変容

学習前後の「ものの見方や考え方」を表14に示す。

表14 ものの見方や考え方の変容（下線は筆者）

| 質問                                                                                                                                                                                                                                                                  | 竹原のいいところは、どんなところですか。                                                          | 人数<br>(複数回答) |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| 学習前                                                                                                                                                                                                                                                                 | 特産品、観光地を名称で回答している。<br>・塩・じゃがいも・埴下牛・竹・大久野島・町並み保存地区                             | 24人          |
| 学習後                                                                                                                                                                                                                                                                 | 地域の人や町並み保存地区の見学をもとに回答している。<br>・山火事から家を守った竹がいっぱいある。<br>・古い建物や町並みが今でも大切にされている。  | 19人          |
|                                                                                                                                                                                                                                                                     | 地域の人や観光客との関わりをもとに回答している。<br>・竹原の人はみんなやさしくて親切。<br>・竹原の人、観光客、お店の人がすごく笑顔になってくれる。 | 9人           |
|                                                                                                                                                                                                                                                                     | 1回目と同様に、特産品を名称で回答している。                                                        | 1人           |
| 質問                                                                                                                                                                                                                                                                  | 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか                                               | 肯定的回答率 (%)   |
|                                                                                                                                                                                                                                                                     | 学習前                                                                           | 42%          |
|                                                                                                                                                                                                                                                                     | 学習後                                                                           | 100%         |
| 単元終了時の児童の振り返り                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                               |              |
| ・私は、竹原のことは前から好きだったけれど、Sさん（地域の人）のおかげでもっと好きになった。Sさんの話やSさんが町並み保存地区を案内してくださったことで、竹原に住んでいても知らないことがたくさんあってびっくりした。<br>・この学習をする前は、「竹原の観光客」のことを考えることはなかったけれど、この学習を通して、「竹原にもっと観光客が来ないかな」と思うようになったし、もっと竹原のことを知りたいと思うようになった。これからは、いろいろな人と仲良くなっていれば困ったときに助かると思うから、地域の人と交流を増やしたい。 |                                                                               |              |

単元の導入で、「竹原のいいところ」を尋ねた際は、すべての児童が竹原の特産品や観光地を名称で回答していた。学習後は、学習を通して知ったことや感じたことへと変容した。対話やPR活動を実行する際に、地域の人や観光客と関わることで、学習前には見られなかった人との関わりから気付いたことを記述している児童もいた。「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問項目に対する肯定的回答率も学習後は高まっており、竹原のために尽力されている地域の人々の姿から、自分も同じように地域の役に立ちたいと考えるようになった児童もいた。観光客という限定した相手から、地域へと視野が広がっていることがうかがえる。

これらのことから、対話の活用は、児童自身が地域のよさを問い直すことや地域の問題を自分のこと

として受け止めることにつながり、課題意識を連続発展させることができたと言える。

(2) 自己の生き方の変容

学習後の児童の振り返りを表15に示す。

表15 学習後の振り返り（下線は筆者）

| 児童 | 振り返り                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| C  | 町並み保存地区を見学して、竹原の文化や有名なものを分かりやすく伝えたいと思った。2回目の対話の後に、5年生の企画書ができたときは、本当に実行できるのか不安になった。改めて、実行することができたのは、あきらめなかったからだと思う。この学習を通して、意見を言い合い、竹原の文化やいいところをどう伝えるのか考えるのをがんばった。これからは、地域の人に礼儀をもって接する。                                                                                                                                                      |
| D  | 2回目の対話のときに、簡単にあきらめるとSさん（地域の人）が来た意味がないし、せっかくここまでやってきたから、私はあきらめたくなかった。みんながあきらめかけていたけど、Sさんが言ってくれたことでみんなが立ち直れた。5年生の企画書が完成したときは、「人がいない」「お金がない」「時間がない」問題も解決したらうれしかった。<br>その後は、観光客の笑顔を想像しながら準備をした。実行日はうまく許可がもらえるか心配したけど、お寺の人がとてもやさしかったので、うれしかった。この学習を通して、人と緊張せずにしゃべれるようになった。最初の自分より成長したと思う。これからは、観光客に道案内をしたり、元気いっぱいの挨拶をしたりして、観光客に竹原のいいところを伝えていきたい。 |

C児は、単元の導入で竹原のいいところを尋ねた際に「大久野島」と答えていた。1回目の対話では、地域の問題を自分のこととして捉えることができず、活動内容も対話前に考えていた「商品開発」から変容することはなかった。しかし、町並み保存地区の見学後、「竹原の文化を伝えたい。塩作りで盛んだったことや日本酒を作っていること、和風の建物を観光客に伝えたい。」と発言し、地域のよさを実感したことがうかがえる。これまでの認識を問い直し、自分の考えを見直したことが分かる。その後は、自分の考えを積極的に発言するようになり、問題を自分のこととして捉えるようになった。2回目の対話では、「たくさんのお金が必要になるからあきらめる。」と考え、「何をやっても意味がない。あきらめたい。」と振り返りに書いていた。ところが、授業の終わりに再度地域の人々の思いを聞くことで、次の授業では「いろいろな意見を出し合いたい。」と考えるようになった。課題意識が途切れそうになったときに地域の人々の思いを聞くことで、自身の認識を問い直し、考えを見直すことにつながった。学習後の振り返りには「地域の人に礼儀をもって接する。」と書き、地域との関わり方を考えるようになっている。対話を通して、地域の人々の思いに共感したことで自身の認識を問い直し、考えを見直すことになり、課題意識を連続発展させることができたと言える。

D児は、1回目の対話では、地域の人に自分の考えを伝えることが難しい状況だった。学習後の振り返りから、2回目の対話で様々な問題に直面しながら、それらの問題を解決できたことに手応えを感じ



ていることが分かる。これまで自分の思いを伝えることに苦手意識を感じていたD児が活動実行日には自らお寺の人に企画を説明し、許可をもらうことができた。出会った観光客に自分が作ったカードを手渡すこともできた。対話に手応えを感じたことで、その後の意欲につながったと考える。対話を通して、新たなことへ挑戦しようとする姿が見られ、課題意識を連続発展させることができたと言える。

このように、課題意識が途切れそうになったときに地域の人々の声で自身の認識を問い直し、考えを見直す姿や新たなことへ挑戦しようとする姿が見られ、対話の活用は自己の生き方を考えるきっかけになり、課題意識を連続発展させることができたと言える。

## Ⅵ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- 対話の活用をし、児童と地域の人々が合意した上で課題を設定することは、児童が自身の認識を問い直すことにつながるとともに、児童と地域の人々の相互理解のきっかけになった。児童は地域の人と一緒に「どうにかして問題を解決したい。」という課題意識をもつことができた。
- 対話における地域の人々の経験を踏まえた指摘は、児童が自身の認識を問い直し、問題を自分のこととして捉えることになり、現実問題に即して自分の考えを見直すことになった。
- 課題意識が途切れそうになった場面で、児童と地域の人々が互いの思いを聞くことは、相互理解のきっかけになり、新たな問いを見だし、課題意識を連続発展させることにつながった。
- 対話を通して、新たな視点が加わったことで、相互の対立が乗り越えられるような解決の道筋を考えることになり、課題意識を連続発展させることにつながった。また、授業の導入で「本時の課題」につながる児童の振り返りを活用することは、児童の課題意識を連続発展させる一助となった。

### 2 研究の課題

- 児童と地域をつなぐ対話の場においても、児童の課題意識が途切れそうになる場面があった。教師の働きかけによっては、児童の課題意識を途切れさせてしまう可能性もあった。
- 本研究では、児童の振り返りの内容で検証を行ったが、振り返りを記述することに課題のある児

童もいた。行動観察や成果物なども検証方法に入れ、児童が自ら課題意識を連続発展させる姿について見取る必要がある。

### 3 成果と課題を踏まえた今後の方向性

- 児童の課題意識が途切れそうになる場面を教師が想定し、対話の場での教師の意図的な働きかけと地域の人々の役割を事前に連携することで、対話がより効果的なものになると考える。児童の反応が教師の想定を超えることも考えられるので、教師の働きかけが児童の課題意識を途切れさせるものになっていないかを吟味しておく必要がある。
- 学習活動の展開に無理がある場合には、教師の働きかけとして、単元計画の順番を入れ替える、児童の課題意識に添った学習活動にするなど柔軟に変えていく必要がある。

#### 【注】

- (1) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』東洋館出版社p. 115を参照されたい。
- (2) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：前掲書p. 112を参照されたい。
- (3) 詳しくは、安斎勇樹・塩瀬隆之（2020）：『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』学芸出版社pp. 27-41を参照されたい。

#### 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』東洋館出版社p. 115
- 2) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 17
- 3) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 27
- 4) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 111
- 5) 安斎勇樹・塩瀬隆之（2020）：『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』学芸出版社p. 49
- 6) 安斎勇樹・塩瀬隆之（2020）：前掲書p. 58
- 7) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 17
- 8) 齊藤萌木（2021）：「学習で生まれる問い、学習を進める問い―協調問題解決をととした問いの創発」小山義徳・道田泰司編著『「問う力」を育てる理論と実践―問い・質問・発問の活用の仕方を探る』ひつじ書房p. 105
- 9) 文部科学省（2022）：『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）』アイフィスp. 67
- 10) 文部科学省（2022）：前掲書p. 107
- 11) 深谷達史（2021）：「問いに基づく探究的な学習とその実践」小山義徳・道田泰司編著『「問う力」を育てる理論と実践―問い・質問・発問の活用の仕方を探る』ひつじ書房p. 147
- 12) 深谷達史（2021）：前掲書p. 153
- 13) 安斎勇樹・塩瀬隆之（2020）：前掲書p. 27

#### 【参考文献】

- 神田章（2023）：「総合的な学習の時間の指導と評価」釜田聡・松井千鶴子・梅野正信編著『ミネルヴァ教職専門シリーズ ①総合的な学習の時間の新展開』ミネルヴァ書房pp. 56-67
- 田村学（令和2年）：「総合的な学習の時間の評価」田中耕治編集代表『2019年改訂指導要録対応 シリーズ学びを変える新しい学習評価 理論・実践編2 各教科等の学びと新しい学習評価』ぎょうせいpp. 134-138
- 梶田毅一（令和3年）：「対話的な学びとは何か」『新教育ライブラリPremier II Vol. 4 対話の研究～対話型授業の創造～』ぎょうせいpp. 54-55